

みらいにつなぐ震災の原風景（フォトエッセイ）

著者	坪田 建明, 金 浩淵
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	196
ページ	42-45
発行年	2012-01
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00004080



■ フォトエッセイ ■

みらいにつなぐ震災の原風景

写真 金 浩淵
Ho Yeon Kim
文 坪田 建明
Kenmei Tsubota

二〇一一年三月以降、海外に赴くと、日本はその後どうなっているのかと聞かれることが度々あった。そのような時には、新聞やテレビを通じて知る被災地の甚大な被害の様子と、筆者の暮らす千葉での放射能被害に対する緊張感を簡単に話す程度であった。そして、徐々に復興しつつあるという明るい希望で話を締めくくっていた。しかし、現地を訪れて目にした景色は認識をまったく改めさせられるものであった。事態の深刻さはメディアによる切り取られた画像や映像だけでは伝わりきっていなかったのである。この自分の目で見た震災の被災状況をより鮮明に記憶に刻み込むことで、日本だけでなく世界各地で起こりうる今後の震災への備えの必要性を再認識し、そして訴え続けることが必要であると痛切に感じた。

直接的には被害を受けていない地域の人々も、これから数十年の間は少なくとも復興税として間接的な担い手となっていく。また、一〇〇〇年に一度の大震災は、これから何世代にもわたって語り継がれることであろう。それは、このたびの震災の同時代人である私たち自身もその語り手となっていくことを意味するのならば、私たちが持つ震災の原風景がその語りの背骨となることではないだろうか。その意味でも被災地を何らかの形で訪れることを強くお勧めしたいと思った。

さて私達が東北の被災地へ向かったのは震災が発生してから半年ほどが経った一〇月の中旬であった。知り合いの先生を通じて東北被災地復興プロジェクトにおける視察への同行をお願いした。レンタカーで仙台空港からの海岸線を廻り、石巻市・南三陸町・気仙沼市・陸前高田町の市町村などへのヒアリングを行った。



仙台空港周辺には戸建てが散在しており、外観的には二階部分は大きな被害はないものの、一階部分は窓や壁などが所々流されており、向こう側が容易に見通せるようになっていた。そして部屋の中まで土砂が入り込んでいた。

空港から海岸に向かう道は、田園であった風景が一面に広がっていた。ここには依然として海水が溜まっているのがはっきりとわかった。また、津波がもたらした流れき撤去はおおむね終わっているのだが、波によって流されてきたものがまだあちこちに残っていた。さらに、まだ土砂が一メートル以上積もっている場所もあるといわれており、このような土地が海岸から三〇四キロ内陸の高台にある高速道路までずっと広がっていた。

私達はまず若林区荒浜の海岸で車を降りた。ここにはもともと海水浴場があり、その近くには民宿などがいくつもあったのだが、それらは土台だけを残して何もなくなっていた。それというのも、倒壊した家屋の撤去は自治体で無料を実施してくれたのだが、基礎部分については無料撤去の対象外であったためだ。太い防風林が途中から折れている様子は、波の凄まじい威力を見せ付けていた。海岸に出て砂浜に立つと、波音に吸い込まれるように波に見入ってしまった。波の打ち寄せる光景はいつも見ている波と何ら変わらないはずなのだが、同じように見る事はできなかった。そして、遠くまで続く砂浜のその先でも、こと同様の光景が続いているのだと思うと心が痛くなった。

仙台市から石巻市、南三陸町、気仙沼市、陸前高田町へと進む中で、市街地を中心に津波の被害を受けた地域はどこでも、土台だけを残してあとはなにもない



光景が続いていた⁽¹⁾。一〇月の時点で、がれきのほとんどは既に特定の場所に集められており、それは建物の二階〜三階ほどの高さに達していた。場所によっては木材と金属の分別作業が行われ、さらに分別された木材のチップ加工を行っているところもあった。同様に車両も整然と積み上げられていた。がれきが撤去された土地は震災以前の景色を想像できぬほどに整然としている。なにもない。そのような景色が三六〇度広がっていた。

石巻・気仙沼などの港湾設備の広がる海に面した地域では特に地盤沈下が生じており、通行止めとなっている場所や、盛り土をしてなんとか道路にしている場所などがあった。また、排水管を通じて逆流してくる海水のため、潮の満ちる時刻になると通れなくなる道路などもあちこちにあった。

このような状況であるため、無秩序な開発を防ぐため、復興計画が確定するまでは建築規制が敷かれている。そのため、自発的な家屋の再建ができず、津波被害が甚大であった地域では、家屋の基礎部分だけを残した景色が広がったままになっている。そうではあっても、被災状況の相対的に軽くて建物が見える状況にある企業などは設備の修復を行っており、営業の再開をしているように見受けられた。だが建物を失った事業者であれば、建築規制のため建物を再建できず、営業休止の長期化を強いられている。そのため自力再生の可能な事業者は、焦燥感を高まらせている。また、この地域の一大産業である漁業については、多くがいまだ営業を再開できていない。それというのも漁港に水揚げされた魚が冷凍・冷蔵、加工を経て出荷されるまでの過程は、多数の企業による密接なネットワークの上に構築されているのだが、そのほとんどの企業が



つばた けんめい／アジア経済研究所 経済統合研究グループ

キム ホーヨン／成均館大学経済学部教授
アジア経済研究所海外客員研究員

甚大な被害を受けているためである。ある企業の単独
操業では生産がすべて完結できない場合が多い。復興
計画の遅れは遺失利益を拡大してしまうのである。一
方で、復興計画の策定は将来を見通した確かな物であ
る必要があるため、時間がかかってしまうのも致し方
ない。現在策定中の復興計画は一〇〇年に一度の震災
に耐えられる街づくりを念頭において練られている。
特に、土地の嵩上げや堤防の高さはこれによって決め
られており、復興計画の大前提といえる。たとえば気
仙沼市では年内の漁業再開をめざし、復興計画の承認
を得るための努力をするなど、行政も最大限の努力を
行っている。冬になれば冷え込むであろう仮設事務室
で復興計画の策定を行っている行政の方々の奮闘ぶり
を肌で感じずにはいられなかった。

希望の証である復興計画は今後着実に実行に移され、
時間が経てば新しい街が作り上げられていくことだろ
う。しかし、復興の事実が震災を風化させてしまつて
はならない。数々の不幸と悲しみを想起すると、この
地震がもたらした出来事を未来につなげていかないとい
けない、という決意にも似た感情が湧いてくる。こ
の気持ちを共有できる人が一人でも多くなることを願
いつつ。

《注》

(1) 広範囲にわたる津波の被害状況は日本地理学会の「津
波被災マップ」によつて確認できる (<http://map311.ecom-plat.jp/map/map/?mid=40&cid=3&gid=0>)。
Google map でも衛星写真が確認できる (<http://maps.google.co.jp/>)。